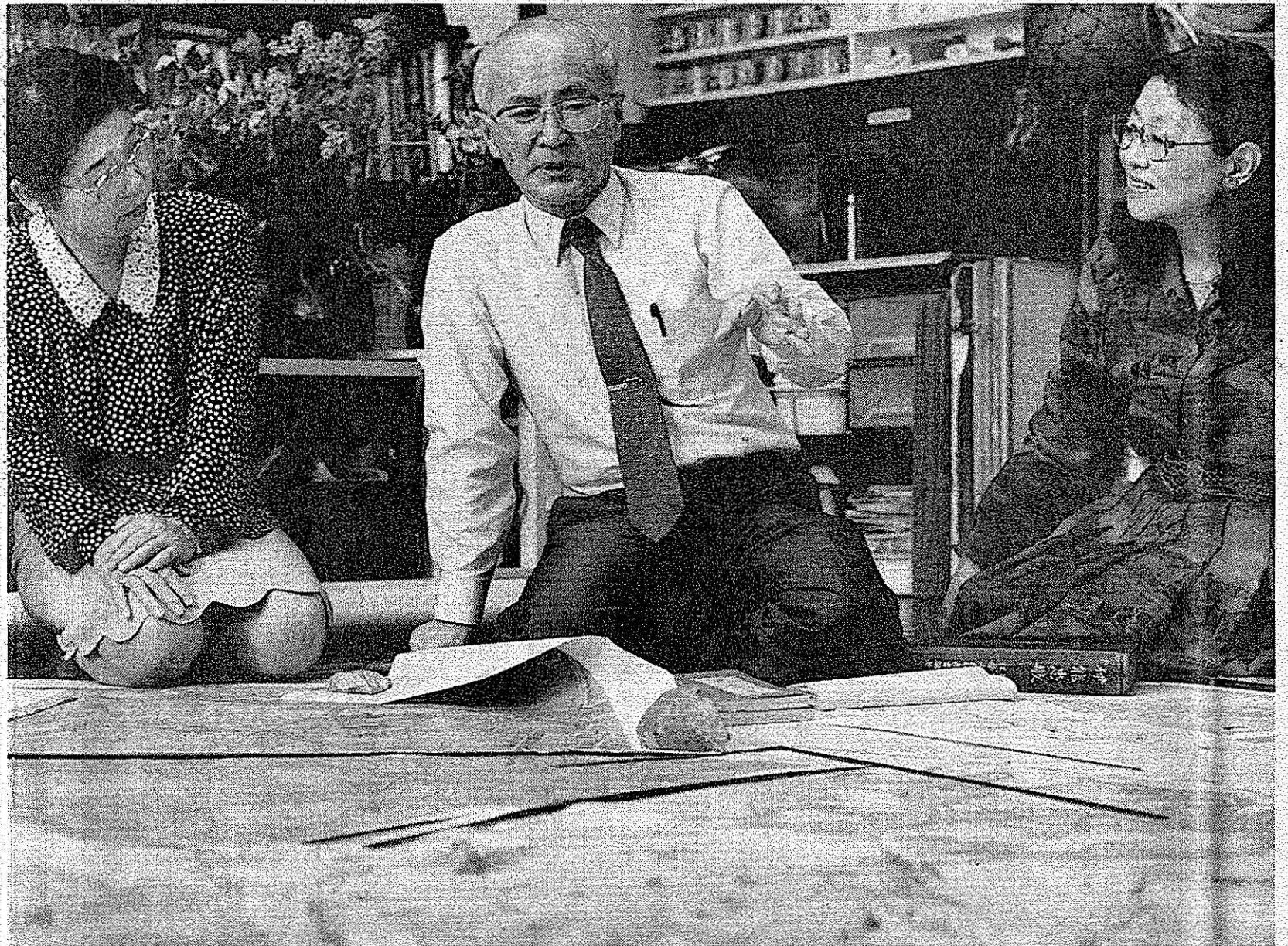


ひと紀行

'95.11.05

伊能日本図探究会代表
わたなべ いちろう
渡辺 一郎さん

世界に散る伊能忠敬の地図追ひ20年



渡辺一郎さんと伊能陽子さん（左）＝東京都世田谷区松原4丁目の伊能洋さん宅で

◆この欄に登場してほしい人を推薦して下さい。それぞれの分野で独自の活動をしている方、特に地方の方を歓迎します。〒104・11東京都中央区築地5の3の2、朝日新聞日曜版編集部あてに手紙をお願いします。

趣味というものは、長くへきエネルギーを自覚めさせる。「なぜ伊能図か」と聞かれても、答えにくいですな。気が付いた時は研究を始めてましたから。私も全国ネットの仕事で、NTTデータ通信で全国の郵便局をオンラインで結ぶ仕事を手掛けて、伊能忠敬が気になり出した。」

渡辺一郎さん(左)が、伊能忠敬(一七四五―一八一八)の地図を追って二十年近くなる。

稲末、日本を訪れた英国の測量艦隊は伊能図に感嘆し、測量の要なしとそのまま帰国した。忠敬は前後十回の測量旅行で、大・中・

小の地図を計四百二十九種類も残した。千葉県佐原市の伊能忠敬記念館をはじめ、成田山の仏教図書館、東京国立博物館などに保存されてはいる。

「でも、三枚組みの小図の三枚そろいは、英国グリニッジの国立海事博物館にしかない。火事で焼失したり、海外に流失したのか、さっと八割が行方不明です」

伊能図の写しも複製を求めて各地を訪ねる。コンピュータ関連会社の会長だが、成果を発表するため、今年一月には「伊能日本図探究会」を作った。東京都文京区の自宅マンションが事務所で、会

報もすでに六号に。

三年前、海外出張のついでにグリニッジを訪ねました。事前許可なしで、実物は確かめられませんでした。が、カラー写真で撮影したのを送ってもらいました」

伊能図がフランスで発見されたと報じたのは、四年前の日本経済新聞だった。持ち主は、国立高等農業専門学校教授のイブ・ペイさん(右)。渡辺さんは、住所を調べ、手紙をやりとりし、今年三月にはペイ家を訪ね、現物を自分の目で確かめた。

「八枚組みの中国で、内容はかなりよい。天測した地点も記さ

れ、東京国立博物館にある中国より古いかも知れません。なぜ、フランスに渡ったかはナゾです」

渡辺さんの記事が朝日新聞に小さく出て、それが、伊能家の子孫の目に止まった。忠敬から数えて七代目が武蔵大学名誉教授の故・伊能敏氏で、忠敬の遺品は世田谷区に住む弟の画家、洋氏と陽子夫人が整理している。

「資料整理は代々、女の仕事のようです。母の代に記念館に寄贈した後も、お雛(ひな)さまやお碗(わん)を包んである紙が、よく見ると、地図の下絵だったりしますね」

陽子さんはそう話しながら、表装した何枚もの地図、恒星を基準に測った度数のメモ書き、景色だけ並べた写生図の巻物、忠敬直筆の手紙などを、渡辺さんに披露した。ペイ家の地図のナゾ解きに話は大いに盛り上がった。

今年生誕二百五十周年で、忠敬の記念切手も出る。佐原市中央公民館では、今月十七日からペイ家の中国が特別展示される。記念シンポジウムには、ペイさんも参加する。伊能図研究は、ドラマチックに進むかもしれない。

文 清水 弟
写真 須長 孝栄